出雲市内神社本殿の特徴

－出雲市内神社調査の成果から－

はじめに　奈良文化財研究所では、2016年度に島根県出雲市の委託を受けて、出雲市内に所在する神社本殿の調査をおこなった。出雲市では、2015年度に島根県神社庁に登録されている189件の神社を対象として、所在や沿革、本殿の形式などについての１次調査をおこなっていた。2016年度は、それらを元に、市職員と奈文研の研究員が現地に赴き、主として外観から本殿の特徴や建立年代などについて調査した（２次調査）。これを162件について実施し、本殿の形式を分類した上で、17件について、本殿内部や棟札等を確認する３次調査をおこなった。ここでは、２次調査の成果をふまえ、出雲市域の神社本殿の特徴について概観したい。

概　要　出雲大社が立地する出雲市には、切妻造・妻入のいわゆる大社造の本殿が多いと予想された。調査の結果、流造が29件、隅木入春日造が３件、入母屋造が２件、切妻造・平入が４件、その他が１件で、これ以外はほぼいわゆる大社造に分類される。暴風雪対策のため本殿を板で囲われ、形式（後述）が不明なものを除けば、118件について大社造の形式分類が可能である。

大社造の形式と特徴　いわゆる大社造に分類できる切妻造・妻入の本殿は、平面のほか、本殿主体部の桁の架け方や階隠の有無などにより、図29のように分類できる。紙数の関係から各形式の詳細な説明は省略するが、Ａ～D3形式はすでに川上貢による指摘[1]があり、E1～E5形式は奈文研の調査[2]で知られていたものである。今回は新たにＤ形式のうち背側面に縁のないD4・D5形式、Ｆの３形式、Ｇの２形式、Ｈの３形式を確認した。

平面の特徴は、縁をもたないE1・E2・E4形式もあるが、通常は正面に縁をもち、しばしば正面の縁の出を他の３方よりも広くとってその両側面に柱間装置を設け、正面に建つ幣殿と一体的に屋内空間として利用する点である。これは建物利用の目的だけでなく、暴風雪から保護する役割を期待したものだろう。また独立した階隠をもたないＦ形式は、正面の木階を幣殿の屋根が覆う場合がほとんどで、幣殿をもつことを前提とした形式である。

構造的には、御扉内部に御神体を祀る身舎とともに、正面の縁や木階を覆う屋根をどのようにかけるかで、いくつかの形式が見られる。Ｅ・Ｆ形式は、E2を除き正面に角柱を立て、身舎の桁を延ばして一体的にかけており、構造形式としては、身舎と正面の縁が主体部を構成するため、梁行よりも桁行が１間大きくなる。階隠をもつＨ形式では、階隠の柱が身舎の桁を受けており、階隠の構造的な強化が図られている。Ａ・Ｃ・Ｄ形式で階隠と正面縁の側面に柱間装置を入れるのは、独立した階隠の耐風対策とともに、構造的な強化をはかるためでもあったと考えられる。

年代的には、近世に溯るものが26件、戦前が64件、戦後が28件で、戦後の物件でも伝統形式を残すものもある。またＡ～Ｆ形式は江戸後期頃までの物件を確認できるが、Ｇ・Ｈ形式はほぼ近代以降の物件である。主として外観からの調査のため、特徴的な意匠をもたなければ、年代の判定材料が部材の風蝕のみという物件も少なくない。本殿内部に棟札を残す事例も少なからずあり、詳細な年代の追究には内部の調査が必要である。

他の形式の社殿　先述したような、いわゆる大社造以外の形式の社殿にも興味深い特徴をもつものがある。形式的には流造や隅木入春日造等の本殿でも、身舎梁行が２間で、桁行の背面のみを２間とした形式がある。すなわち柱配置では、G1やF1と同じものがあるのである（流造で各２件、５件）。さらに１間社では、柱配置はE3やF2と同じとなるものがある（流造で各５件、６件）。

正面に幣殿を設けて、本殿正面と接続させるものが多いが、正面の軒先が低くなるため、小規模な本殿を中心に基壇を高める場合がある。また、やはり正面の縁や木階を室内に取り込んで一体的に利用するものが多い。

まとめ　この調査を通じて、市民にとってもっとも身近な神社の本殿が、出雲大社の本殿やその境内社など形式を受け継ぎつつ、また流造にも影響を与えるなどしながら、さらに近代の変容を経て現在の姿になっている様相の一端をつかむことができた。これは出雲市に限られた事象ではないと想像され、身近な神社本殿を調べることで、その地域の神社建築の変容の様相などをあきらかにできる発展性を秘めている。2017年度は以上の成果を報告書にまとめる予定である。　**（箱崎和久）**

註

1）川上貢「島根県の近世社寺建築」『島根県近世社寺建築緊急調査報告書』島根県教育委員会、1980。

2）奈文研『出雲大社境外社建造物調査報告』2009。

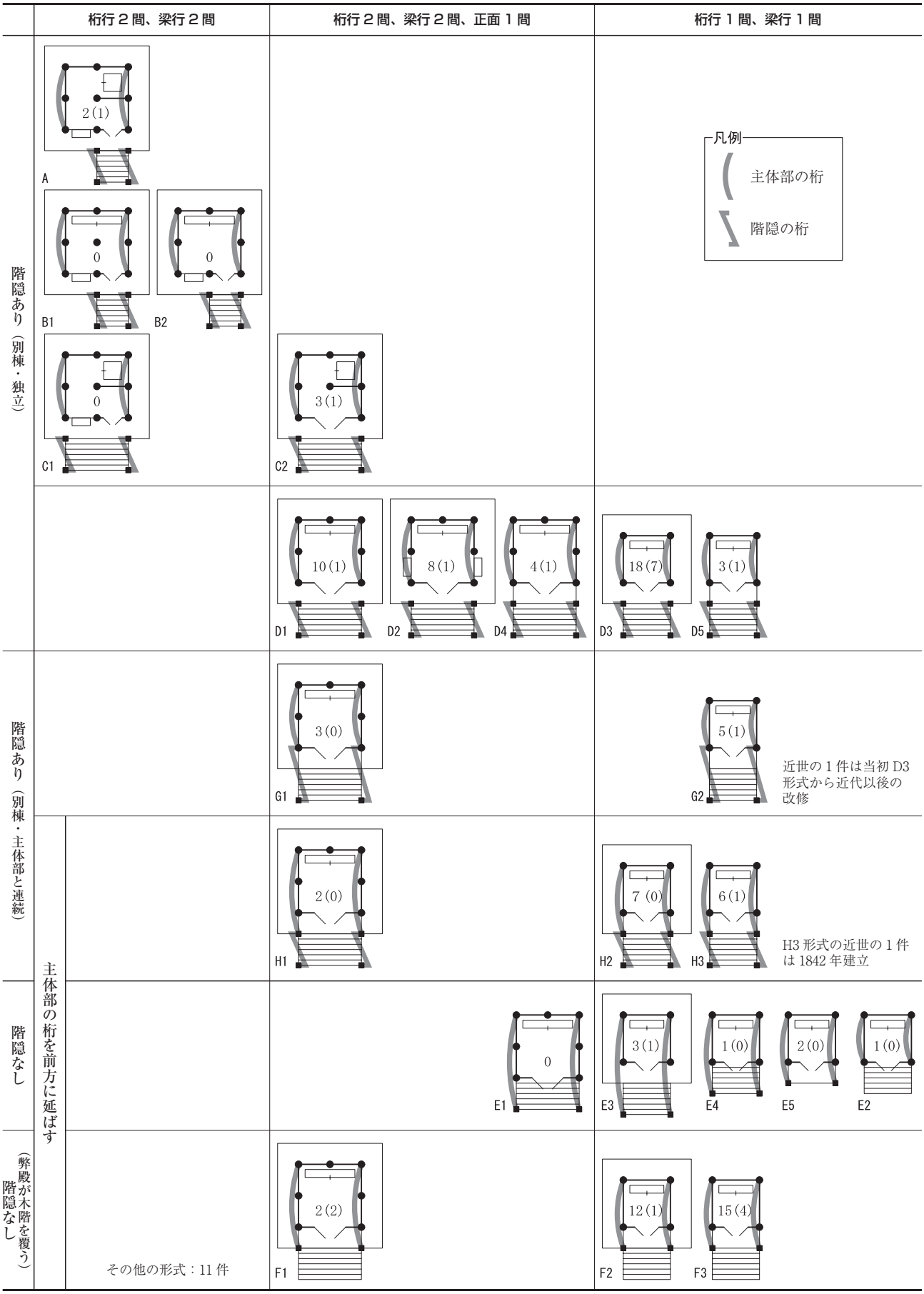

図29　いわゆる大社造の形式分類平面模式図（内部の数字は今回の調査で確認した件数。（　）内はそのうち近世の件数）